
とある上条の学園生活

迦梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある上条の学園生活

【著者名】

Nマーク

【作者名】
辻梓

【あらすじ】
とあ魔やとあ科の登場キャラたちが一つの学校で繰り広げる学園生活 友情あり？青春あり？恋愛あり？の日常をかけめぐります

設定（前書き）

作者の初作品です

口調や一人称が間違つたりするかもしません

作者は上条さんが大好きです

設定

禁書のキャラ達が同じ学園都市で勉強したり・青春したり・恋愛したりのドキドキ学園生活wwwです

学園設定

学園都市・・・といつも一つのマンモス校で、学生は全員その学校と一緒に通っています

小等部・中等部・高等部・大学・職員棟など、敷地の中に全部あります

教室は魔術師・能力者で分かれます

寮は男子寮・女子寮に分かれています

寮では魔術師と能力者が同室になつたりします

Lv・成績で部屋の質が変わります

二人部屋です

キャラ紹介

【上条当麻】

能力：幻想殺しイマジンブレイカー
Lv：レベル0無能力者

高校一年生

【禁書目録】Index - Library - Prohibition
rum

能力：自動書記ヨハネのペン

魔法名：Dedication 545（献身的な子羊は強者の知恵を
守る）

中学一年生

【御坂美琴】

能力：超電磁砲

Lv：超能力者

中学一年生

【一方通行】

アクセラレータ

能力：ベクトル操作

Lv：超能力者

高校一年生

【浜面仕上】

Lv：無能力者

高校一年生

【土御門元春】

魔法名：Failerere825（背中刺す刃）

能力：肉体再生・陰陽術

Lv：無能力者

高校一年生

【姫神秋沙】

能力：吸血殺し
「原石」の一つ

高校一年生

【妹達】シスターズ

能力：欠陥電気レディオノイズ

Lv：2～3

御坂のクローン

中学二年生

【打ち止め】ラストオーダー

能力：欠陥電気レディオノイズ

Lv：3

小学五年生

【風斬氷華】

能力：正体不明カウンターストップ

高校一年生

【スタイル＝マグヌス】

魔法名：Fortis931（我が名が「最強」である理由をここに証明する）

能力：ルーン魔術

中学二年生

【神裂火織】

魔法名：S a l v a r e 0 0 0 (救われぬ者に救いの手を)

能力：天草十字教

聖人

高校三年生

最後に
シスターズ
妹達が普通に学園生活を送っています

土御門はスパイではありません

このほかにもバンバンキャラを出しておいきたいと思っています

設定（後書き）

亀更新ですが、よければ見てやってください

妹達はレバ大量生産のために生み出された結果、無理だったのでもう一人殺されることなく学園生活を送っています

土御門は魔術師に能力は仕えるのかという実験のせいで魔術も科学もできます

最後に、作者は上条さんが大好きです

上条の不幸～第壹話～（前書き）

設定つけくわえ

寮は学校の敷地の外にあり、敷地の外にはお店などがあります

それと学園都市の中は科学がもちろん進んでいます

上条の不幸～第壹話～

午後七時・学園都市

ここは東京の約三分の一でかさをほこる周りと隔離している都市
現代科学の何十年と進んでいる科学都市でもあり
総人口の八割が学生で、その全員が能力者か魔術師という学園都市
でもある

能力者は脳を開発し、カリキュラム授業を受け

魔術師は基礎を学びそこから独自の魔術を開発していくということ
をしている

その都市で一人の人物が壮絶な鬼ごっこを繰り広げている
一人は黒髪のツンツンヘアー上条当麻

「待ちなさいよっ！」

そういうつて追いかけるの学園都市に七人しかいない超能力者（LV
5）の第三位

御坂美琴

「誰が待つか！大体いきなり電撃を食らわすなんてどうこう神経してんだよ！」

「つづつといわね！アンタが無視するのが悪いのよ

「だから気づかなかつたんだって」

「『ぬづかない』アンタが悪い…」

そうこうして御坂が電撃を飛ばしてきた

「だから危なこいつのーつてか上条さん死んじゃこまよー。」

それを右手で防ぐ上条

「別にここじゃない。『ぬづ』アンタにはきかないんだから」

「きかないからって普通人にそんな電撃を食らわせようとはしねえ
だろー！」

「うー・・・・うー わー・黙つて食らひなればいいこのよアンタなんか
「わざわざ人は人として『ぬづ』かと上条さんは思こますよ、ビロビ
リ」

「なつ・・・・ビコビリこつなかつ……」

そして御坂が自分のポケットの中にあるマイクを取つ出したりとした
とき

「ぬづー！ などいひで何ひとゆふ、かみやん」

現れたのは上条の回級生の青髪ピアスと
クラスメイト

「『ぬづ』かみやんの事だからまたフラグでも立てたんだよー」

回じく同級生の土御門元春だった
クラスメイト

「なんやとーズルイでかみやん。いつも一人でええ思いしとるやな
いか」

「せうだぜ、今日なんか 遅刻してきたあげく、クラスの中で五つ
の指に入る巨乳女子の胸に顔をうずめたんだからこやー」

「だからアレは事故だつたんだよ。わざとじやないんだつて」

一人の話に上条が言い訳をする

「ひいやましきなあーかみやんは」

「こつともこつとも不幸だーって言つてゐるわりにはフラグ建てまく
りだからこやー」

「俺がこつづラグを建てたんだよ」

クラスの女子ほとんどにフラグを建てている奴の台詞とは思えない
言葉を吐く上条に

「・・・ほ・・・なあ、かみやん」

「なつ、なんでせうか」

「ちよつと僕らと話しそか」

青髪ピースは激怒したようだ

「こや、お前等のは話しあつて言わないからな。それはリンク」

いいから来るんだ二ヤー

そういうて上条が逃げ出そうとしたところを二つの間に近づいたのか土御門が右腕を掴んで逃げないようにようになると

「ど！」に行くんや？かみやん

青髪もそれに便乗して上条の左手を掴んだ

「わい。話は察についてからじつくつと聞かせて貰いましょ」

「覚悟するんだぜ、かみやん」

一人は最高の笑みで上条をひきずりながら連れ去っていく

「つっはなせえ～～～つ！～！」

それに上条は抵抗するが、男一人、しかも自分より体格の良い二人に掴まれているのでビクともしない

「往生際がわるいぜよ。かみやん」

「観念するんやで。かみやん」

「ああ～もうつ！不幸だあ～～つ！～～！」

そういうて今度こそ上条は一人に連れ去られてしまった

「どうして、こうなるのよお～・・・・・」

そして、最初に上条と鬼ごっこをしていた御坂はただただ上条が連れ去っていく様子を見ているしか出来なかつた

上条の不幸～第壹話～（後書き）

はい、第壹話です。まったくもって意味が分かりません。

でも、この小説は彼等の日常を書くことなので多分いいと思います

作者はデルタフォースが大好きです

そしてヒロインは美琴か姫神しか認めないと云うね、とんでもない
作者ですね

なので魔術サイドの面々はそんなに出てこないかもしません

それでは、こんな文才も何もない小説でよければ是非読んでやって
下さい

それぞれの朝（男子寮）～第3話～（前書き）

第1話の翌日です

寮は一人部屋です

男子

浜面・上条

垣根・一方

青髪・土御門

スタイル・エツアリ

女子

インデックス・御坂

姫神・吹寄

風斬・神裂

打ち止め・妹達

のペアで部屋が分かれています

妹達は只今療養中なので都市内には十人程度しかいません

寮には食堂があり、皆そこでご飯を食べます

食堂は寮に住んでいるご飯を作れる子が交代で作っていきます
それと、風呂というよりも大浴場があり、そこで風呂に入ります

個室はありません

それでは本編へ Let's Go

それぞれの朝（男子寮）～第3話～

午前七時・男子寮

そのとある部屋に寝て居る上條を起^{ハシマツル}そうとする影があった
その人物は浜面仕上、上條と同部屋で^{クラスメイト}同級生でもある

「おーい。起^{ハシマツル}る、上條」

「ん～～～～～～後十分」

「いや、もつ七時だからな、起きないと遅刻するや」

「・・・・後五分・・・・」

「おーい・・・・つたぐ」

そうこうして上條の寝て居る布団を

「早く起きやがれっ！……！」

剥^{ハグ}ぎ取^{ハサフ}った

「うおっ！向^{ハシマツル}すんだよ浜面」

「起きないお前が悪い！ホラ早く行くぞ、さつさと着替^{ハラフ}えろ」

「う～～・・・ 分か^{ハシマツル}つた・・・」

そつこつて自分のベッドから立ち上がり服を着替え始める上条

「寝……」

「お前が遅くまで起きてるのが悪い！」

「仕方ねえだろ！ 昨日はあいつ等から逃げてたんだから

そう、昨日上条が土御門と青髪に連れ去られていった後、なんとかそこから逃げ出した上条は一人から追いかけられたのだがしかも、逃げれば逃げるほど追いかけてくる人数が増えていった、という恐るべき事態になつた

その後、生き抜いた上条が帰つたのは深夜だった
そして風呂に入つて寝るときにはもう午前三時だった

「お前がフラグを建てるからだろ……」

「すか！」

「……そんな事言つから追いかけられるんだよ」

「何だと！ だいたい、追いかけられるべきは俺じゃなくてお前だと上条さんは思つんんですけど……」

「は？ 何で俺が追いかけられなきゃいけねえんだ？」

「…………滝壺…………」

「……？」

「俺知ってるんだぜ。お前が滝壺つて子とメールしたり電話したりしてたの」

「なつ・・・なんで・・・」

「いやな、そんな嬉しそうな顔で電話で話したりしてつや 誰にだつて分かるつて」

「なつ・・・「なんやと、まさか裏切ったんか浜面」

そうこうして部屋のドアをブチ破ったのは青髪ピアスと

「お前は俺らと回りだと思つていたのに・・・」

土御門元春だった

「ああて、その滝壺つてのはどーいのどこつなん? 浜面くん」

やうこつて浜面に一歩近づく青髪

「大丈夫だぜ、質問に答えてくれれば学校には聞こへんじゃ」

やうこつて浜面の逃げ道をふさぐ土御門

「うへ。上条助けてくれ!」

浜面は上条に助けを求めた

「あつ、俺飯食つてくれるけど、十御門たちはいつたのか？」

上条は浜面が助けを求めるのを華麗にスルー

「おうひー今さつま食つてきたんだぜ」

「早いなあ」

「昨日、風呂入つてなかつたから朝風呂もかねて早く起きたんよ」

「フーン、じゃ俺飯食つてくれるわ

「こつこつしゃーい」「

男子寮食堂

「お。意外と少ないな」

上条は食堂に入つて自分の朝飯を今日の食堂番の人へ貰つてあいつる席についた

「朝から豚カツで・・・・・」

今日の朝飯は豚カツだった。

そして上条が黙々と朝食を食べていくと

「よおレベル〇」

上条の同級生の垣根提督と

「よオ最弱」

同じく同級生の一方通行がそこに居た

「おはよつ、垣根に一方通行俺より遅いなんて珍しいな」

いつもは上条より早く起きる一人は、寝坊したらしく

「一方通行が起きなくてな・・・・・」

「ンだよ、俺は眠かったんだよ」

「はいはい、一人とも喧嘩するなよ

そうこうして食べ終わった食器を返却した

「さて、じゃあ俺は飯食ったし行くわ、一人とも喧嘩すんなよ

そうこうして上条は食堂を後にした

「まれほれ、さつとと咲くんや」

「うあひ・・・ちよひ・・・さめひ・・・・・」

「ハーハー。浜面、早くしゃべったほうが身のためだ」

「だか・・・ひ、 やへ、 めり・・・ひて・・・」

「やめて欲しいんなひれひとせばここんやでーなあひつひー

「ハーハーハセ、浜面。お前がわざと話してくれればこな思こま
なくひすむんだこー」

「だれひ・・・がひ、 せひ・・・ひすか・・・」

「それは残念だこー」

「ややね、 やれじや。 可哀想やけび・・・これ使おひか

と、 ハーから取つ出したのかわからなこソレを浜面に見せ付ける

「なひ・・・それは、 つや・・・め・・・・・・

とたんに叫ぶ浜面

「それじやあな、 浜面。 お前との日々楽しかったぜ」

「浜面・・・お前の」とせ忘れへんで・・・・・

やうこいつ浜面ことひめを刺せつとした時に

「お前等向してんだよ」

呆れたよ^ううに上条が入ってきた

「かつ・・・かみじょー助けてくれ~」

と。情けない声で上条に助けを求める浜面

「・・・・・一体なにやつたんだよ、青髪に土御門」

二人に上条が問い合わせる

「別にたいしたことばしてへんよ」

「やうだぜ、かみやん。俺らはただ質問に答えてくれない浜面にお仕置きをしただけだぜ」

「お仕置き・・・つて?」

「ああ、たいしたことないでー。ただ、ちよつと寝技をかけさせてもらつただけだ」

「寝技?」

「やうだぜ、ま。正固めやいろいろとやつても全然叶ひとしないからちよつと体に詫^いうとしただけだニヤー」

「体にひいてびひやつてだ?」

「ん?」^いある釘バッジで・・・「もういに分かつたからもひやめひ」

「なんや、かみやん。大丈夫やで、殺さへんかい」

「やつだぜ、かみやん。ただ死にたいけど死ねないよつた痛みを味あわせるだけだから」「やー」

「お前等一人とも怖ええよー」

「ま、そういう訳やからさういはんていつまでもおもてらへよ」

と、二つの間にか浜田は上条の後ろに隠れるように身をひざめていた
「やつだぜ、かみやん。邪魔をするんだつたら、かみやんでも容赦しないぜよ」

「ちよつ待つて、ホラ、もうこんな時間だし、早くしないと遅刻するし、なつ?」

そうつって何とか話をそらす上条

「なんやとーそれを早く言こなやかみやん、遅刻なんかしたら子萌先生が泣いてしまうやろ・・・いや、子萌先生の泣き顔もええなあ・

・・・

などと青髪が妄想をし始めた

「はあ、仕方ないにやー。子萌先生に泣かれるのも困るし、仕方ないから」「まあでことじやんやるぜよ」

「まこせー、じゃ鞆もつてこよ。一緒に行つやが」

「おぐだぜ。じゅこべぜ青。」

そつこつて土御門と青髪は自分の部屋に戻つていった

「それじゃ、浜面も早く用意する」

「おひへ、分かつた」

そして上条も鞄を用意しすると

「かみやーん。こくでえー」

と、青髪の声が聞こえた

「分かつた今行く。ホラ、浜面早くしろ」

そういうて四人で学校へ向かつたテルタフォース+
彼等はしらなかつた。

この先学校あんな事がおこるなんて・・・

それぞれの朝（男子寮）～第弐話～（後書き）

さて、最後に妙な伏線を張つてみたわけですが・・・次の第参話は
それぞれの朝（女子寮）です

なので学校の話は四話になると思します

それでは、こんな文才もなにもない小説を読んでくれてありがとうございました

出来れば次話も読んでくれると嬉しいです

それではそれぞれの朝（男子寮）～第弐話～
おしまいです

それぞれの朝（女子寮）～第参話～（前書き）

武話まではスラスラ書けるんだけど、それからがなあ～・・・
なんて WWW文才のない作者でしいません

さて、前書きも面倒になつてきましたので
本編へGO!-!-

それぞれの朝（女子寮）～第参話～

午前6：00 女子寮・i n食堂

「ハハハハ…まだ眠いんだよ短髪うー！」

女子寮の食堂で眠いと言しながら大量に朝ご飯を口の中に運んでいるのは禁書目録インデックス

本名はIndex - Library - Prohibition

「そう言つてる割にはしつかりと食べてるじゃない…」

そして禁書目録が短髪といった相手とは、上条にビリビリと呼ばれている能力者の第三位超電磁砲レールガンこと御坂美琴

「それとこれとは別なんだよ…短髪…」

「それでも食べすぎよ…後、短髪つていつな！」

朝からハイテンションなヒロインのお二人です

そしてそんな二人に近づく影が…

「おはようございますと、ミサカはお姉さまと、禁書目録に挨拶をします」

「ミサカはミサカはおはようつて、二人に挨拶してみる」

一つの影といつのは妹達の一人と打ち止めだった

「二人ともおはよう！早くしないとご飯なくなるんだよ」

「ご飯がなくなつたら間違いなく禁書目録のせいなのだが……まあ食卓は戦場といいますからね

「そうですね、それではお先にど、ミサカは上位固体より早くご飯を取りにいきます」

「あつ、ズルーアーつてミサカはミサカは下位固体を追いかけてみる」

その後喧嘩しながらもご飯を取つてきた二人は御坂たちと同じ席に座る

「それにしても・・・同じ顔がこうも並ぶと不気味を通り越して笑いが出てくるよね」

と、無邪気に笑いながら言つ禁書目録さん

「むう・・・お姉さまと下位固体は似てるのは分かるけど、ミサカはミサカは似てないよ」
オリジナル

「え、すっごくそつくりです

さて、朝ごはんを済ませて食堂から出るとそこには風斬・神裂・姫神・吹寄の四人組があるところで悩んでいました

「それで、如何してこうなつたの？」「え、私が来たときにはもう既に・・・」「そう。でも。それじゃ犯人は・・・」「だれなんでしょうか・・・」

ちなみに左から吹寄 神裂 姫神 風斬の順番です

「みんな、そんなところで何やつてるの？」

御坂が尋ねると皆がそちらのほうを向く

そして口を開いたのは神裂だつた

「いえ、実は洗濯機の中が・・・・・」

「「洗濯機の中?」」

御坂と禁書田録の声が綺麗にはもつた

「洗濯機の中のもの・・・といつか、その・・・服が・・ないんで
すよ・・・」

またもや御坂さんと禁書田録さんの声がはもつた

「まあ、見てみれば分かりますよね」

そういうて神裂が洗濯機のふたを開けて、そこを一人は見た

そこには、何もなかつた。

文字通り何も入つてなかつた

「ないつて言つことは盗まれたのかも・・・」

などと禁書田録さんがいつもより真面目な顔をしていつてい

「いや、でもさ。洗濯物がないつて言つともあつたんじやない
の?」

御坂が言つと

「それはないわ。寮で人数が多いから洗濯物がないことはほとんどない。というよりも洗濯物がたまるほうが多いわよ」
それに吹寄が言う

「だつたら、・・・盗難ね」

「・・・やつぱりその可能性が一番高いですよね・・・」

と、六人が言っていたときに

「あらあら、六人ともいいんですね？まだ居て？」
と、

話しかけてきた彼女はオルソラ＝アクリナス、ちなみに今日の朝ごはんは彼女が作りました

「どうじうことですか？」

神裂さんがオルソラさんに聞きます

「どうしたも、じつしたも・・・もう出ないと遅刻してしまいます
よ」

そのオルソラの隣にいた五和が答える

それを聞いた六人はあわてたように学校に行く準備をした

まあ。その後は洗濯機のことをオルソラと五和に話して学校に彼女達は向かった

通学中

「やっぱり、あの洗濯機の中には洗物が入っていたみたいですね」
さきほど、オルソラと五和に聞いたらしい神裂が言う

「じゃ、盗難は100%決定事項になるわけだ」

それに付け足す吹寄さん

「でも、犯人は誰かしらね？」

疑問を口に出す御坂さん

「女性が女性の下着を盗むわけないから。十中八九。犯人は男」
理屈を述べる姫神さん

「でも、だったら犯人はどうやって、盗んだんでしょうか？」
疑問を口に出す風斬さん

「うー。女の子の下着を盗むなんて許せないんだよー」
名も知らぬ犯人に怒る禁書田録さん

「そうね、確かに盗むなんて最低ね」
「犯人を見つけたら半殺しにします」
などと、いつていると

「でも、犯人が誰だか分かりませんよ？」
風斬さんが疑問を口にする

「そうね。この際。男子全員に話でも聞いてみたらどう?」
姫神さん

「確かに・・・そうすれば犯人が分かるかもしません」

「でも、当人達が嘘をつけば分からなくなるわよ
「・・・・ま、一応は聞いておいて頂戴」

そう吹寄が言つと皆肯定して

後はどうやって聞きたですか？などの話で盛り上がりながら通学をした

それぞれの朝（女子寮）～第参話～（後書き）

はい、参話終わりました。それでは次回第四話

やつと学校に行きます

やつとですよ。てかそれよりもキャラの口調がそんな分からないん
ですよねwww

ま、仕方ない。なんてつたって自分が書いたからな・・・自分で言
つてもむなしくなりました

それと「オオカミさんと七人の仲間たち」というアニメを見てはま
つてしまい、原作全巻買いましたwww

とてもおもしろしかったので小説書こうかなーと、思っています！

はい、「参話までしか書いてなくて、しかも素人の癖に何いつてん
だテメH」と思う方もいると思います

というか作者本人が思っています

なので、書くかどうか迷っているのですが・・・

ま、当分は禁書田録に専念することにします

それでは第四話でお会いしましょう

学校の朝～第肆話～（前書き）

はい、更新遅くなつてすいません

宿題が、夏休みの宿題のせいです・・・
ま、宿題も全然終わっていないんですけどね

それでは、めんどくせこのでさつれと本編へLet's Go

学校の朝～第肆話～

「や」学園都市に一つしかない田大な学校の高等部のある教室だ
そ」で、上条当麻・土御門元春・青髪ピアス・浜面仕上の四人が言
い争いをしていた

「だから…やつぱつ一番は「黒」だつてんだろー。」

「かみやん、それは違つぜ。やつぱ一番は「白」だつてんだよ。
や」決まつてんだから

「何言つてんだ、つづり。一番は「縞」やめつてんなやなこ。
浜面もやつぱつやわ」

「やうだな・・黒も捨てがたいが「紫」とかもいいな

「紫やと…ソレは浮かばんかつたわ。」

「さあがバー好きなだけはあるな」

「バー関係ないだろー。」

「やうだぜこ、バーといえば白に決まつてのいやー

「何言つてんだよー普通は黒だろー。」

「二人ともなに言つとる。バーガールは赤が最強やー。」

「バニーは黒に決まつてんだろ！」「

「ホラー！浜面だつて黒だつて言つてんじゃねえか！」

「二人ともおかしいで！赤に決まつとるやないか！」

「だからバニーといつたら白ウサギに決まつてんだろボケが！』

「何やと！大体つつかーが白がいこいつて言つのはロリに似合つから
でバニー自体は白じやなくともえんちゅうー！」「

「それが真実なんだにゃー。」の偉大なるロリの前ではレオタード
だろうがスク水だろうが、そういうつた衣服の属性はかき消されてしま
うんだぜい。つまり、ロリは何を着せても似合つのだからバニー
ガールだってロリが最強といつことだにゃー…………！」「

「」のロツコーン軍曹が！何でもぺたぺたにしゃがつて、そんなにロ
リが好きなら小等部にでも行つてきやがれ！……！』

「それがな、かみやん。小等部の警備つて厳しそぎて入れないんだ
にゃー。なあ、青ペー！』

「わうやな、警備員が出てきたときにマジドビツじよか思たわ』

「マジで入るうとしたのかよ・・・・』

入りうとしたことがある一人の事実にドン引きする上条と浜面

「言つとくけどな。僕らだけで行つたんやないで』

「アセラレータ」
「アセラレータ」
「アセラレータ」

「アツ・・・一方通行が！－！－！」

「ナニが、アレ?」
ラストオーダー

「そりなんだせい 打ち止めるは会いに行かなければどうで諂ひたら文句を言いながらも付いてきたんだにゃー」

「文句をこながられることへぬか、此のシンドルヤー、此題のト
しまつたんやで」

「一方通行つて……ヨリソシだったのか……」

と、浜面が驚きの声を出した。

「エ……誰が口口シナシだ？」

一方通行がいつの間にか浜面の後ろに立っていた

「一九三〇年二月一日」

「あア、テメエらが黒だの白だの紫だの、意味分かんね」と言つてゐるときからだよ」

((((ほどんど最初つかりじやねえかー。)))))

「それで、その黒だの由だのつに聞こ争っていたのつて何の話してたんだ？」

と、いつの間にか垣根提督まで話に入ってきた

「…………最初は上条と土御門が【下着は黒と白どっちが最強か】を言い争っていたら……」

「…………青髪が「縞もええもんやでー」的なことをこいつてきて……」

「そのあと浜面が「紫ももいな」って言つてきただぜい」

「そんで、なぜかバーーガールの話になつたんや」

と、四人が一人に解説してやると

「「お前等馬鹿だろ」」

と、一人が呆れたように言つてきた

「何だよーお前等が何話してたんだ?って聞いてきたから答えてやつたのにー!」

「その言ひ方はあんまりじやないかにやー」

「いやで、第一かみやんや浜面は分かるけどー僕が馬鹿なんは納得いかへんでー!」

「おいまた、確かに上条は分かるが俺まで馬鹿なのは納得いかねえぞー!」

「おいー!俺が馬鹿つてのが分かるつてどうこいつ意味だよー!」

「「「「「言葉通りの意味だろ」」」」

上条の言い分に一方通行や垣根までもつこんだ、上条に100のダメージ

「なつ・・・・・さすがの上条さんでもコレは傷つくな……」

と、めげずに言って返すが

「事実なんだから仕方ねえだろ」

「本当のことなんだから仕方ないんだぜー」

「真実やから仕方ないんや」

「仕方ないんだよ、上条」

「それが事実だからな」

と、またもや五人で上条に（精神的）攻撃。上条の精神に150のダメージ

「もつ、いこよーせうだよ、どつせ俺は馬鹿ですよー頭悪いよー馬鹿で悪いかー」

「ワリイな。」「悪いこやー」「悪いで」「悪いな」「ああ、悪い」

上条が開き直つても五人の精神攻撃はとまつません

「つ・・・・・馬鹿の何が悪いんだよーー」

「馬鹿なことがだぜー」

「やつやでかみやん、よく無いやないか。馬鹿は死んだほうがいいつて」

「言わねえよー!大体、それは俺に死ねつていつてるのか!死んだほうがいいって言つてんのか!」

と、上条が反論すると

「うつさいわよ上条!朝っぱらから大声だすな!」

いつの間にか現れた吹寄からの頭突きをくらってしまった

「なにすんだよー!吹寄」

「あんた等がうつさいからよー!」

「だからうつて頭突き食らわす!」とねえだり!..」

「朝から騒いでこの貴様が悪いわ」

「騒いでたのは俺だけじゃねえよー!」

「どうせ元凶は貴様なんでしょう」

「やつやつて決め付けるのはよくないと上条さんば思こます

「事実なんだから仕方ないでしょー!」

「事実じゃねえよ……」

と。吹寄と上条が口喧嘩を始めてしまったとき

「二人とも。少し。落ち着いて」

姫神が現れて二人の喧嘩を止めた

「吹寄さん。今朝のこと。忘れてない？」

と、姫神が吹寄に尋ねると、吹寄はハツ！…としたような表情になる

朝といつのは女子寮の洗濯物が盗まれた騒ぎのことですね
確か、男子全員に話を聞くっていましたね

「そうね、忘れてたわ・・・ありがとう、姫神さん」

「別にいい。それよりもこの際だから上条くんたちに聞いてみる?」

と、実はこの一人はまだ誰にも話を聞いてなかつたりします
「・・・そうね、この際だし聞いちゃいましょう」

そういうて上条たちのほうを向いて

「ちょっと聞きたい」とがあるから、少しいい?

「えっと・・・俺等全員?」

聞いたのは浜面だった

「ええ、貴様等六人に聞きたいことがあるの」

「……別にいいけど聞きたいことってなんだ?」

「……実は……『キーンゴーンカーンゴーン』
吹寄が上条たちに聞くまえに予鈴がなつてしまつた

「……姫神さん……」

「わかつた……」

「上条」

「なんだ?」

「今日の昼休みに屋上ではなしの続きをするから昼休みに屋上に来てくれる?」

「いいけど、俺今日は購買なんだけど……」「俺もだぜい」「僕もや」「俺も」「俺もだ」「俺もなんだが」

つまり全員購買なんですね

「いいわ、購買でパンや何か買ってからきて頂戴」

その様子に呆れたように返す吹寄

「それじゃ、あと少しでH.R始まるから貴様等も早く席につきなさいよ」

そういうて吹寄と姫神は自分の席に戻つていった

「それじゃ、俺らも子萌先生が来る前に席につくか・・・」

そういうて男六人も席に戻つていった

学校の朝～第肆話～（後書き）

駄文でもうしわけありませんでした

ほんつとづに文才がない駄文ですよ
誰か文才を分けてくれ——

五話は犯人探しでもやるつもりです。

さあて、誰が女子寮の服を盗んだんでしょうかね WWWWW

それでは、できたら五話でお会いしましょう

捜査協力～第五話～（前書き）

さあて・・・すつげえ久しぶりの投稿ですねwww

まあ、これは全て私の文才のなさがいけないんです

反省はしていませんが後悔はしています

最悪ですね

それでは本編へどうぞ

捜査協力～第五話～

「」は学園都市に一つしかない学校の高等部、の屋上だ
只今の時間は昼休み

上条たちは、購買の激闘の末に勝ち取った戦利品を手に、朝吹寄と姫神に言われたとおりに屋上に来ていた

まあ、激闘の際に上条がまたフラグを建てて、周りの男子生徒から殺氣の目を向けられたのは「」では省略といつことだ

屋上に、吹寄と姫神は弁当を持って来ていた

ちなみに、一人はルームメイトなのでお弁当は姫神が毎朝作ってあげている

「わりい、待ったか？」

「大丈夫よ、それにあたしたちが頼んだんだから少しくらいは待つわ

「それで、俺らに話つてなんなんだぜい？」

「話。といつより相談に近い」

「相談？僕等に相談してもなんも解決にならへんと思つで」

「そんなことない。私たちより何か知つていてると思つ

「で、その聞きたい」とつてのはなんなんだア？」

「話すと長いから、昼食を食べながら話すわ」

そういうて各自その場について、上条たちはパンやジュースを頬張りながら一人の話に耳を傾けた

～十分後

「～・・・という訳なのよ」

十分後・・・ようやく一人の話が終わった

「えっと・・・つまり」

「朝起きて食堂で」飯を食つた後

「洗濯機の前にねーちんと風斬がいて」

「二人に話しかけて、どうしたのか聞いてみると」

「寮の洗濯物が消えていたんやな」

「それで自分達で犯人を見つけ出そつと、オレらに話を聞いてみることにした」

「……とにかく？」

上から上条・浜面・土御門・垣根・青髪・一方通行・上条の順番です

「ええ。やつこいつ」とよ

「でもさ。そんなんだつたら風紀委員ジャッジメントと警備員アンチスキルに頼めばいいんじゃねえの？」

上条が吹寄に質問すると

「なつ！？／＼それは、その……」

と。その上条の言葉に赤くなり、じどりもどりになる吹寄

その表情で上条以外の全員が察したが上条は頭に？マークをつけて
いる

「なあ。何で吹寄はあんな顔真っ赤にしてんだ？」

「かみやん・・・少しば『トリカシー』つてもんを考えるんだにやー

「『トリカシー』？意味がわからねえぞ土御門」

「やっぱ、かみやんは馬鹿やな」

「馬鹿じやねえよー」

「いや、上条、お前ちゃんと一緒に人の話聞いてたか？」

「聞いてたけど。わかんねえんだよー」

「じゃア、ヒントをやるから、聞いてみる」

「ヒント、盗まれたものは洗濯物だ」

「それは、一人が言つてたじやねえかよ」

「ヒント、洗濯物の中には下着があるんだぜ」

「洗濯物だからあたりまえだろ」

「ヒント^{ジャッジメント}、風紀委員^{アンチスキル}や警備員には男がいるんやで」

「そりゃ、女だけじや駄目だろ」

その上条の反応を見てその場にいる全員が「はあ～……」と深いため息を漏らした

「なんだよー? 分かんないものは仕方ないだろーー。」

「かみやん・・・ わすがに銃^ガるんで・・・」

「やつだこやー、わすがの土御門さんでもかみやんが「んなに鈍くて馬鹿だとは思わなかつたぜい」

「まあ、馬鹿なのは上条だから仕方ないけどわすがにこ^レはな・・・

・

「」ただけヒント出しても分からぬ^ハなんて・・・ もつダメだな

「よくそれで高校入学できたな上条・・・・・」

「貴様は、ほんとうに麗鹿だったのです……」

「確かに。」これは驚いた、「

と、男子のみならず女子にまでこいたい放題いわれ放題の上条

「なんだよ、もうここから教えるよ……」

「馬鹿のかみやんに言つても分かるかどつか疑問やけび……、可哀想なかみやんのためや教えてあげるで」

「一々癪に障る話の方だよな……」

「事実なんやからしうがないや。では、説明をどうぞ十鶴門わん

「ヤレ」で何で俺になるんだよ……」

「ええやん、減るもんじやあるまいこ」

「青いペーがかみやんに教えるつてこいつたんじやないか」と

「いいからいいから、せよ、かみやん」説明したつて「

「ハハ……釈然としないんだぜ……」

と、文句を嘗いながらひやんと上条に説明します

「……………というわけだぜい、分かつたかにやーかみやん」

「つまりは、男子生徒や教師に下着を見られる可能性があるから出来る限り自分達で探したいってことか？」

「ああ、もう二つひとだきこ

「大体わざのヒントで考えられるのは『ヨギア』に決まってんだろ」

「いや～・・・吹寄だからそんな女らしい理由なわけがないと思つて・・・・」

「なに、いうとるんかみやん。確かに吹寄さんは「対戦ミジュー属性」+「男らしい性格」の持ち主やけど、それでも女の子なんやから、そりや下着を見られたくはないやわ」

「そうだぞ、上条。いくら男らしいからって『一応』吹寄だつて女なんだぞ」

「まあ、『一応』だけどな……」

と、男性陣にいわれ放題の吹寄制理さん

「・・・・キサマ等・・・・」

HISTORICAL PERSPECTIVE

どうやら、吹寄の堪忍袋の緒も切れてしまつたようです

「あたしが異性に下着を見られたくないと黙つのがそんなに不思議か？」

「……ながら自分のおでこをあげておでこ全開にする吹寄さん

「いや、不思議つていうか。意外つていうか……」

「せんなの吹寄のキャラじやないつていうか……」
と、上条と浜田がいいわけする中

「仕方ないやろ、男子生徒にブラを見られても恥じらうもしなかつたんやから」

「やつだぜい。普通の女子生徒はなんらかの恥じらうつてもんを持つはずなのに吹寄はそれがないんだにやー」

「……貴様等！ いいからあたし達の洗濯物について知つてることを教えなさい！ ……」

「吹寄おでこロックスッターッ！」

「吹寄さん。早くしないと。昼休みが終わる。」

「そつ、そつね。いつもいる場合じやないわ。といつわけで貴様等！ 何か知つていることがあるのなら今すぐこいなさこーもし、嘘をついたらどうなるか・・・わかるわよね」

「そつこと、上条たちは首を縊こぶつて、知つていることがないかどうか考えてこる

「オレは知らねエナ」

「俺も」「俺もだ」「ムカつく」ことに俺もだ」と、一方通行に続き浜面、上条、垣根が吹寄に答えるが・・・

THE JOURNAL OF CLIMATE

土御門と青髪の二人は冷や汗を流しながら黙つたままだつた

貴様等・・・何か知つてゐるの?」

「「すこせこせこ」

「お、おお、俺らが知ってるわけないやろ。なあつちー！」

一人は否定しているが挙動不審+冷や汗で何かをしつてていることは一人の様子で分かる

「知っている」とはちがうんと話して。」

と、姫神が自称魔法のステッキを取り出して二人を脅す

「いや、これは教えてはいけないんだにゃー」

「そうやで、さすがに仲間は売れinいんや」
二人は断固として口を開かない気です

「仕方ないわね、姫神さん。殺つちやつて」

「アーティスト」

「フハハハ、美女からの攻撃ならドンと来いやー。」

「清清しいほゞのミツブリだな」

「チツ、これじや青髪を喜ばすだけね。仕方ない、姫神さんアレもつてきて」

「ハジキ。せじき。」

そして姫神の手には一冊の本が握られていた

「フハハハハ…どんな手を使おうともまくは絶対に口はわらへんで、なあつつかー」

「ハジキやで、俺らにはどんな手も通用しないぜー」

「フッ。笑つていられるのも今のうちよ」と、吹寄は余裕そうだ

「じや、姫神さん後は、分かつてゐるわね」

「大丈夫。」

そつこつて姫神は上条たちのほうを向いて

「上条くん達、後ろを向いて耳をふさいで、耐性のないあなたちでは「ノコは危険すぎる」

そうこわれた上条たちは黙つてその言葉に従つ

「なつ、なんや、その薄つぺらい本で僕等に何する気なん?」さすがに怖くなつたのか、青髪が声を震わせながら質問する

「安心して。
十秒も持たない。」

姫神はそういうつて自分のもつてる本をパラパラと捲つていき、あるページで手を止めた

「やめて欲しければ。知ってる」と全部話してね」

そういうで、先ほどのページを一人向けて見せる

その瞬間

一人の悲鳴が学校中に響き渡った

ここで、姫神が一人に見せた本をご紹^ハ介しよう

恋愛モノが書いてある

自分と同じ同姓の男と男の恋愛モノを見せられる時点でも相当堪えるが、姫神が持っている本はR-18のものだったので、二人は男と男が絡み合っているシーンを見てしまったのだ

姫神さんが何故このような本を持っているのかというのは深く追求しないで下さい

「ちうや、ひいちーー田をつぶればあれば田に入る」じゃないで

「 そ う だ ゼ い 、 確 か に す さ ま ジ い 破 壊 力 だ が 見 え な け れ ば 怖 く な い
に ゃ 一 」

そして二人は目をつぶつた。

「まだ。甘い!」

そういうつて姫神は本を自分の懷に戻してヘッドフォンを一つ取り出
し、二人にそのヘッドフォンをつけて

さて、分かっている人もいると思いますが説明しよう

今、姫神が二人つけたヘッドフォンには「B-L-C-D」という男と男の恋愛をCDにしたものとながしているのだ。
しかもR-18、一人のライフは〇に等しい。もう見てられないほど
どのありさまだ。

ちなみに、姫神さんが何故「B-LICO」お持つて居るのかは深く追求しないで下さい

「わ、分かつたこやー。皿つかい町くじのくらうフオノを外してく
れ・・・・」

「包み隠さず何でも教えるから、早く」のベッドフォンを取つてく
れ・・・・」

そう、二人がいったので姫神さんは一人のヘッドフォンを取つてあ
げました

「ち、早く教えなさい。もうすぐで昼休みがおわっちゃうんだから」

「「じ、実は・・・・・・」」

「隣の組の佐藤つて奴が何かたくさんでいるらしいんだぜい」

「たくさんでいる、って何を?」

「僕等もよう知らんけど「手に入れたらお前等にも分けてやるよ
つて言われたんや」

「手に入れたらって」とはまだ手に入れてないじゃないか?」

「それがな、かみやん。今日の食堂で、「例のものが手に入つた
つてオレヲにいつたんだぜい」

「そんな怪しい」としつてたんなり句で言わなかつたんだよ

「まだ「例のもの」を見てへんから、洗濯物のかどうか分からな
いんや」

「で、本当は？」

「「まだ見てないのに没収されて堪るか！？！」」

二人はその後、姫神の自称魔法のステッキで叩きのめされました
「まあ、いいわ。もう時間がないから放課後にその佐藤つて奴のト
ロにこくことにしましょ」

「だったら皆に連絡してみる」

「やつね、あつそつだ、貴様等もちゃんと協力しなさこよ
そういうて上条たちのほうを見る

「なんで俺たちまで？」

「万が一何かあつたときに貴様達の力が必要になるかも知れないか
らよ」

「御坂や神裂もいるんだから大丈夫だろ」

「いいから来なさい……」

「「「「「「はー・・・・・」」「」「」」

吹寄のあまりの迫力に、思わずつなづいてしまった上条たち

「それじゃ、放課後に学校の食堂に集合ね」

そういうて皆は教室に戻つていった

捜査協力～第5話～（後書き）

久しぶりの投稿だったのでおかしいところがあつたり、誤字脱字があつたりすると思いますが。

ま、久しぶりってことは関係ねえんですけどね

しかし、意外とこれ長引きましたよ。

やっぱ途中でおふざけをいれてるからですかねwww

でも私はシリアルスつて書きたいけどかけないんですよ、ギャグも書けてるかどうかわかんないんですけどねwww

それでは次回は多分なんとか早めになるように努力します

いや～中一の一学期は大変だ～

それでは、ここまで読んでくださつてありがとうございました！～！

作戦会議～第六話～（前書き）

イエイ！

やつと六話ですよ

でも六話なのにまだ一田が終わらないとかないわあ～

あ、それとアイテムやグループの設定は後書きにかけております

それでは「本編へ」Let's GO

作戦会議（第六話）

「Jリーグは学園都市に一つしかない学校の高等部の食堂だ

今の時間は放課後なので、食堂はがら空きだ

そこに上条当麻・土御門元春・一方通行・青髪ピアス・吹寄制理・
姫神秋沙の六人がいた

彼等は女子寮でなくなつた洗濯物を探すために、吹寄に頼まれて（
脅されて）、快く（しおうがなく）引き受けたのだった

ちなみに垣根提督は研究所に、浜面仕上はアイテムという部活動の
仕事（主にパシリ）があるので今はいないのだ

「それにしても、遅いわね。御坂さんに禁書目録」
インデックス

「それに、風斬も来ないな」

「風斬さんは仕方ない。だつて。今は研究所に行ってるんだから

風斬氷華、AIM拡散力場の集合体である彼女は、自分の存在を保
つため、一週間に一回、研究施設で調整を行わないと上条たちとの
学園生活を送ることが出来ないので

「でも遅すぎだろ。それに打ち止め（ラストオーダー）や、御坂妹
だつてきてねえし」

「そうね、私達のHRが終わって、大体一時間は経つてるわ

只今の時刻は午後五時過ぎ、今日は六時間授業だったので、普通は四時三十分以降にはPCRが終わっている時間帯だ

「ついのエラが早すぎたんとひやうん?」

「まあ。今日は子萌が出張だったから。早く終わったけど。これは遅すぎだと想う」

「もうだよな、もう、残ってる生徒なんて部活動生や風紀委員ジャッジメント以外にはこないんじゃねえの?」

「もへ、土御門さんは帰りたくなつてきたこやー」

「オレもだ」

「駄田よー貴様等にはその佐藤とやらの居場所まで案内してもらわないといけないのー」

「案内つていつても佐藤は男子寮にこらへんやで」

ちなみに男子寮は女子禁制、女子寮は男子禁制になつています

「だから、貴様等には佐藤を男子寮から呼び出して欲しいのです

「じゃあ、携帯で呼び出せばいいこじやねえか」

「携帯番号しつけてるはずなのでしょうが」

「んじや、教えてやるぜー

「女子からの電話なんて不審がられるに決まってるでしょ」

「いや、普通に女子からの電話がキタ━━━(・・・)━━━!とかお誘いキタ━━━(・・・)━━━!って、こうつ感じに浮かれるに決まってるって」

「わかんないじゃない！」

「いや、分かるぜい。俺も男だから」

「僕もわかるで、男やから」

「ま、普通に女子から『今から〇〇元きて』とか言われたら、浮かれるよな」「

「けど、メアドも知らね奴からかかつてきたり、少しほは疑つんじやねエの?」

「そんな些細な」と氣にならない位に浮かれるにせまつてゐる」ぢ一

「そりそり、それが男といつ生き物やからな」「貴様等が馬鹿な」とよく分かつたから・・

「馬鹿じゃないぜい」

「うっさい。それよりも待ち人がやつとこ到着みたいよ」

その言葉にその場にいる全員が食堂の入り口に目を向けると

「遅れたんだよ」

「待たせてごめん」

「待たせてしまってすいません。と、ミサカは謝つてみます」

「ごめんね、待つた?つて、ミサカはミサカは聞いてみる」「すいません。遅れました」

「『めんなさい、研究所のほうで少しトラブルが・・・』と、上から禁書目録、御坂美琴、御坂妹、打ち止め、神裂香、風斬氷華の六人が来て

その後に

「少し待たせたかい?」

「すいません、遅くなりました」

と、何故かスタイル=マグヌス、海原光貴ヒツヤリがたつていた

「おつかつたわね」

「いや～男手が必要だと思つてスタイルと海原を呼んで来たんだけど、・・・高等部にはコイツラが居たはね・・・」

「なんだ?一人とも俺らみたいに脅されたのか?」

「いいえ、自分等は御坂たちが来てくれつていうから、来ただけですよ」

「よく断らなかつたな」

「御坂さんの頼み」とを、自分が断るはずないでしょ?」

「僕があの子の頼みを断るはずないじゃないか」

「…………」「…………」「…………」「…………」

四人が（お前等どんだけだよ……）といつ田を向けていると

「そんな目しないでください、貴方達だって自分の好きな人や好きなタイプの人からから頼まれたら断れないでしょう」

「なつ・・・僕は彼女（禁書目録）にそんな感情は／＼／＼・・・・・

「

「へえ～ そなんだあ WWWWW」

「へえ～ そなんかあ WWWWW」

「あ、つきみたち！何が言いたいんだ」

「いや、べつに何もないよな青髪」

「そうやで、べつに何も思つてないで。なつ、かみやん」と一人は言つているがその顔は間違いなくにやけていた

と、青髪と上条がスタイルをそつやつてからかつて遊んでいたときに、土御門と一方通行は先ほど、海原のいった「貴方達だって自分の好きな人や好きなタイプの人からから頼まれたら断れないでしょう」のことと土御門は自分の義妹の舞夏で、一方通行は打ち止めで考えた

「確かに、断れないにゃー」

「あア、死んでも守るなア」

その一人の言葉に

「お一人とも、お分かりいただきましたか」

「ああ、お前が断れないのも無理はないにゃー、あんなので頼まれたら、絶対に断れないぜい」

「………………」

海原が今の言葉に固まってしまった

「墮天使エロメイドの格好で……あんな頼み方は反則だぜーーー。」

「どんな妄想してるんですか！」

「え？ どんなつてそりやあ、舞夏が墮天使エロメイドを着てくれて・
・「もうついいです。聞いた自分が悪かったので」

「いやいや、こいつから凄くなるんだから。まあ、聞けよ

「なんでもどうでもいいときに真面目な口調になるんですかー。」

「舞夏の墮天使エロメイドがどうでもいいだーーー？」

「どうでもこーですむ

「じゃあ、御坂美琴が墮天使エロメイドを着るのはどうでもいいのかにゃーーー？」

「どうでもよくないに決まってるじゃないですか！」

「ハイシラ、もう末期だな」

「じゃあ、一方通行は打ち止めが墮天使エロメイドを着ているのはどうでもいいことのうのかにゃーーー？」

「どうでもよくねHに決まッてんだろオガ！」

「なら、貴方も自分等と同じ末期ですよ」

と、グループ（約一ヶ月）が騒いでる横では

「だから、僕はあの子に恋愛感情なんて持ち合わせてないんだ！」

「はーはー

「本当にわかつていいのかい？」君達は

「わかつとぬ、わかつとぬって

「なら、ニヤニヤ笑わないでくれるかな？」

「いやー、だつてなあかみやん」

「うんうん」

「そんな動搖しながら答えるも説得力のやからな」

「だよな～」

「やっぱ分かってないんじゃないか！」

「仮想するよー。」

上条と青髪がスタイルをからかっていた

しかし、男子たちがわざわざ遊びでいると……。

「ううと、アンタたちー。」

「なんですか？ 御坂さん？」

御坂の声こじらへ反応した海原・・・・さすがですね

「作戦会議だよー。//サカは//サカは言つてみる」

「作戦会議だア？」

「はー、話は先ほど吹寄せさんから聞きました。佐藤、と言つ人をどうひじて呼び出し、私達の盗難物をどう確保するのか、とこいつことを話しかねのうです」

「なるほどな、で、作戦会議ついでに、作戦とかは考えてあるのかにやー？」

「作戦についてはもう考えてあります。と、//サカは簡潔に答えます

「考えてあるんやつたら、作戦会議はこりんとやつた？」

「作戦会議つていうより、役割を決めるつていつたらいいのかな？」

「役割つてなんのだい？」

「それを。今から話す。だから座つて」

姫神がいつと、皆一つの大人数が座れるテーブルについた

「で、役割つてのは何なんだ？」

最初に口を開いたのは上条だった

「役割つていうのは貴様等男子の役割よ。男子には三つの役割に分かれてもらつわ」

「まず一つは、誘導係。これは佐藤を私達が指定した場所に連れて行く役割になるんだよ」

「この役割の人は、もしルームメイトがいたのならその人物も一緒に連れて行つてください」

「そして二つ目が、探索係になります。この係は佐藤さんの部屋から私達の盗難物を探索して、押収する役割になります」

「そして最後が戦闘係です。戦闘係といふのは、もし犯人がこの計画に気づいてしまって能力でこちらにはむかつて来た場合にその役割の方達に応戦してもらいます。と、ミサカは懇切丁寧に説明します」

「それで、その役割はどうやって決めるんだア？」

「決めるついで何かわざついで決めちゃったのついでサカサカサカサカ
力は言つてみる」

「へえ、それで僕等はどんな役割なんや?」

「それを今から話す。まず。誘導係は土御門くんに青髪くん。探索
係はスタイルくんに海原くん。最後の戦闘係は一方通行くんと上条
くん」

「何で俺が戦闘係なんだよ!?」

「僕は探索係がいいわ!-!」

「俺だつて探索係がいいに決まつてる」やー

と、^{デルタ}フォースの三人は女性人に向かつて講義をする

「土御門」と青髪は佐藤と顔なじみなんだから貴様等じゃなきやおか
しいじやない、それに盗難物に手を出さない確証がないから却下

「・・・・・・・・・・・・」

青髪と土御門は黙つてしまつた、ビリヤードマジで手を出すつもりだ
つたらしい

「それと、上条は相手の攻撃を貴様の右手で打ち消してもらわなき
やいけないんだから却下に決まつてるでしょ」

「それって、盾になれつて言つ」とじゅねえかよ

「あら、 そう聞こえなかつた？」

「お前なあ・・・・ま、 いいけど。 でも俺、 佐藤の能力知らないん
だけど」

「それは先ほど調べました、 ドミサカは胸を張つて言います。 佐藤
きよたか
清隆レベル3の風力使いエアロシユータです。 と、 ミサカは補足説明をします」

「よつこもよつて風力使いかよ・・・・」

「大丈夫よ。 怪我しても姫神さんが応急処置してくれるから」

「やうこいつ問題じゃねえよ！」

「じゃ、 作戦を言つはね」

「え？ ちゅつと吹寄さん、 無視ですか？ シカトですか？」

「うひ セコわよ上条、 どつせもつ決ましたことなんだから、 謹めな
セコ」

「うひ セコうひ・・・・・・ 分かったよー やりますー やるよー やれば
いいんだが三段活用ー！」

「分かればよろしく。 それじゃ、 作戦を言つわ

まず誘導係の土御門と青髪が佐藤を私達女性がいるところまでつ
れてきて頂戴、 さつき神裂さんが言つたとおりにルームメイトも一
緒にね

「つれてきたらどうするんだにやー？」

「ショッピングとかで相手を足止めするの、その間にスタイルと海原の探索係が部屋を搜索して、私達の盗難物を確保、そしたら私達に電話して」

「分かりました」

「そして戦闘係の上条と一方通行は、私達の近くでショッピングでもしておこて」

「一緒に買い物すればいいじゃねーか」

「それだと、相手が怪しんだりするかもしれないでしょ」

「男」「人でショッピングって・・・・・」

「まあ、いいじゃない。それじゃ、上条と一方通行は「コレをもつていて」

そして吹寄が差し出したのはトランシーバー（二個）だった

「何でトランシーバー？」

「二ひきの状況が分からないと貴様等だつて手出しの仕様がないでしょ」

「なるほどな」

「それじゃ、あんた達、寮に戻つて」

「何で寮に戻らなきやいけないのかにゃー？」

「寮に戻つて荷物をおいた方がいいでしょ」

「アツヤアツヤナビ」

「それ、アヒル。一度は寮に行くなだし」

「アツだね。じゃあ帰るか」

「じゃ、作戦決行時刻は午後六時よ、土御門と青髪はその時刻に佐藤を連れてセブンマートに集合よ。じゃ、解散ー！」

作戦会議～第六話～（後書き）

アイテム・スクール・グループはこの学校では何でも屋のようなものをしています

その活動内容は主に生徒や教員の依頼があれば、落し物搜索からいろいろあります

そして、何故分かれているのかと云うと、部活動ではなくてボランティアのようなものなので、報酬なしで休みなしなのはあまりにもひどいので、一週間ずつの交代でやつていくのです

そしてボランティア精神の皆無な人たちが何故入ってるのかと云うと、レベル5の中からくじで決まり、その他は統括理事会が決めることがあります。

つまり、本人達はいやいややつてるのです

それでは今回はこれにて次回で盗難事件ラスト！・・・の予定です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7931m/>

とある上条の学園生活

2010年11月28日01時43分発行